

複合的資源管理型漁業促進対策事業（抄録）

森 啓介・池脇義弘・吉見圭一郎・團 昭紀

徳島県海域を、播磨灘・紀伊水道・太平洋の3海域に分け、各海域の漁業実態に即した「資源管理型漁業」を推進するための調査を行った。調査結果の詳細は、『平成13年度 複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書』を参考にされたい。

小型底びき網漁業についての取り組み（播磨灘および紀伊水道海域）

漁獲実態調査では、小型底びき網漁業の主要対象魚種の漁獲量変動を把握するために、北灘漁協の漁獲量を調査し、また、北泊、北灘および和田島漁協に所属する小型底びき網漁船を対象にした標本船調査を実施した。ヒラメ、マダイなどは漁獲量はほぼ横這いあるいはやや増加傾向にあり資源状態は良好と考えられたが、アナゴ、クルマエビ、シャコの漁獲量はここ数年で急減しており資源状態の悪化が懸念された。

また、紀伊水道で実施予定の小型底びき網漁船減船の効果を見積もるために、クルマエビを指標種として、本種の資源量解析と減船による資源回復効果のシミュレーションをおこなった。その結果、減船を実施しないとクルマエビの漁獲量は減少し続け、これを増加傾向に転じるためには30隻（全体の約13%）程度の規模で減船をおこなう必要があることが示唆された。また、資源量解析から当歳のクルマエビに対する漁獲圧が高いことが推定され、小型エビを保護するような管理方策が有効であると考えられた。

瀬戸内海機船船びき網漁業についての取り組み（紀伊水道海域）

瀬戸内海機船船びき網漁業(以下「パッチ網漁業」という。)の操業状況を整理するとともに、異なる網目の袋網で操業した際の漁獲物を比較し網目拡大効果を検証した。また、漁場形成の状況を把握するための基礎的試験を行った。

操業状況の整理については、農林統計及び主要漁協統計によりパッチ網の操業状況をとりまとめた。

また、標本船日誌により操業並びに漁獲状況を把握した。

網目拡大効果の検証については、網目拡大実施に伴う効果の検証及び網目拡大効果の展示と拡大を目的として行った。4統のパッチ網に網目の異なる(200,220,240,260径の4

種類)袋網を付け同時間同海域を操業し、漁獲されたシラスの品質及び漁獲量等を検討したものである。また、網目拡大を実行した和田島漁協のパッチ網漁家に対して、拡大の効果に対する評価を照会して回答をまとめた。曳網は6月6日に2回行った。240径,260径,200径または220径の順に漁獲物重量が小さくなった。網目間の漁獲物重量差は、カタクチイワシのみでみた場合が全漁獲物重量でみた場合より小さかった。網目が小さいほど、漁獲物中のカタクチイワシの比率が減少する、魚類以外の生物の比率が増大する傾向が認められた。また、網目が小さいほど、漁獲カタクチイワシシラスの平均全長が小さくなり、漁獲カタクチイワシの全長にばらつきが目立ち最大度数も小さくなる傾向がみられた。シラスは、構成種の単一性が高く魚体の大きさにおいてばらつきが少ないほど商品としての市場価値は高い。今回の調査結果から判断すると、資源管理方策の一環として行っている網目拡大については、その本来の目的である商品価値の向上をある程度実現していることが示唆された。網目拡大の前後を比較すると、網目拡大後の印象について、漁獲量は変わらず、品質は向上し、歩留まりもよくなったとらえている漁家が多かった。

漁場形成の状況を把握するための基礎的試験では、「シラス試験採取網」(通称「中層トロール」)を用いて採集を行った。カタクチイワシシラスが5-16尾採集できたことから、当試験網による採集の有効性が確認された。

多種類の漁業が組み合わさった営漁形態についての取り組み（太平洋海域）

漁獲統計調査では、資源管理対象魚種をモニタリングするため、モデル地区(牟岐地区：牟岐東および牟岐町漁協)の月別漁獲統計を集計した。有用藻類の増養殖試験では夏期にクビレツタを、冬季にフトモヅクとマコンブおよびワカメの導入を検討した。

クビレツタ：2カ月間の籠養殖をおこなった。50gの母藻から3kg以上のクビレツタが収穫でき、母藻の確保から籠養殖までの技術を、漁業者自らが着業しやすい方法で提案できた。加工や販売方法にあい路が残った。

フトモヅク：漁業者の利用度が低い3カ所の漁場へ種網を張り込んだが、選択した場所ではフトモヅクの収穫はできなかった。当該地域には多くの漁業種類が混在し、1年

をとおして沿岸部を高度に利用している。そのため、養殖網が設置できる場所-とくに春期の波浪を防げる潮通しのよい漁場の利用が困難である。現在のところ、当該地区におけるフトモヅク養殖の事業化は時期尚早と考えられる。

マコンブ、ワカメ：昨年度の結果をうけて、マコンブおよびワカメの幼体をロープに差し込んで試験をおこなった。マコンブは3月末までに2 m程度に成長したので、漁業者4人が刈り取ってアワビ漁場へ餌料を供給した。ワカメは沖出し当初の降雨で藻体がダメージを受けて、ほとんど収穫できなかった。